

名勝名古屋城二之丸庭園第5次調査（北園池）の追加報告

高橋 圭也

キーワード

発掘調査報告、二之丸庭園、四ツ代山、北池、御泉水、園路、飛石、回遊式庭園

1 報告の経緯

名勝名古屋城二之丸庭園第5次発掘調査（以下、第5次調査とする）は平成29年（2017）に行われた発掘調査である。調査は栄螺山、北池⁽¹⁾、将校集会所前庭、将校集会所跡、四ツ代山で行われた。栄螺山は栄螺山北園路調査区、栄螺山南園路調査区の2地点、将校集会所前庭は枯池調査区1と枯池調査区2の2地点に調査区を設定しており、合わせて7か所に調査区が設けられた（図2）。このうち四ツ代山を除く6箇所は2020年に刊行された『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次』（以下、『第4次～第6次報告書』という）にて調査成果が報告されている。

ところが四ツ代山調査区は報告書の中で位置は示されているが、立中で言及がなく、平面図が掲載されるにとどまり、遺構の評価や出土遺物の報告は行われていない。報告が『第4次～第6次報告書』から漏れ、今日に至るまでその成果は活用されていない。

二之丸庭園では昭和51年（1976）に最初の発掘調査である名古屋城二之丸庭園第1次発掘調査が行われ、翌年に第2次調査が実施された。その後平成25年（2013）名勝名古屋城二之丸庭園第1次発掘調査⁽²⁾が行われ、以降は現在まで毎年発掘調査を実施している。これら調査の成果は調査後、数年或いは数十年が経過しつつも漸次報告されている。しかし当該年次の報告書が刊行されているにもかかわらず、報告されていない調査区が存在する状況は芳しくない。『研究紀要』の場を使って第5次調査四ツ代山調査区の報告を行う。

本報告執筆に際しては平成29年（2017）に作成された内部向けの中間報告レポート、調査日誌、遺構図面等を参考にした。

また、四ツ代山調査区は庭園の北西（栄螺山北園路調査区）から北池へ接続する園路の途中にあり、調査区は栄螺山北園路調査区や北池と密接にかかわっている。これらの調査区については『第4次～第6次報告書』で報告されているが四ツ代山を含む一帯を俯瞰した検討が十分に行われているとは言い難い。特に園路の検討が行われていないことは今後の整備を困難にするため、この場を用いて検討を行う。

遺物の所属や調査の諸元などは例言、凡例、抄録に代わり表1と図1を作成した。

2 現況地形と絵図から見た四ツ代山の概要

二之丸庭園は17世紀前葉に作庭され近世～近代にかけてたびたび改修された庭園である。現在みることができる遺構は19世紀前葉に改修された庭園を基盤とし、19世紀後葉以降に陸軍が改修し、近年に名古屋市が復元的に整備を行った後の姿である。北池（御泉水）と南池（東御泉水）を中心に複数の築山や建物、景石などを配置したいわゆる回遊式庭園である。

四ツ代山は北池の北岸西側に位置する築山（写真1～4）である。東は権現山、西は栄螺山に挟まれる築山が集中する空間に位置している。権現山とは田楽山を挟んで連続し、一つの山脈状の築山を形成している（図2）。北池側（南東）は池の護岸を形成するタタキと石組によって断崖となっている。北池側は石垣によって山肌（土）の露出が少なく、石組は修景機能の他に北池への土砂の流出を防ぐ役割があると考えられる（写真1）。権現山側（北東側）は山の鞍部であり、隣接する田楽山との境となっている。鞍部四ツ代山側には高さ約25cm、幅約25

表 1 調査の諸元と例言兼凡例

調査年次	期間	面積	監督機関	発掘調査支援委託受注者
第5次	2017年6月20日 ~12月28日 うち四辻山調査区 7月20日~24日	715㎡ うち四辻山 調査区90㎡	名古屋城総合事務所	株式会社イビソク

遺跡名	遺跡番号	所在地	世界測地系座標
なごやじょうあと 名古屋城跡	市遺跡番号 7-1 県遺跡番号007001	愛知県名古屋市中区 本丸、二の丸	東経35度11分6秒 北緯136度54分8秒

例言兼凡例

- 1.本報告における座標系は世界測地系第7径を使用した。標高は東京湾平均海面(T.P.)を使用した。図版上に示した方位は真北である。
- 2.本報告における色調は小川正忠・竹原秀雄2018『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局、財団法人日本彩色研究所監修による。
- 3.本報告における遺構番号は本報告に際し筆者が付与した。『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次~第6次』とは対応しない。
- 4.第5次調査にて作成した遺構図類、撮影した画像等の調査の記録と出土遺物は名古屋城調査研究センターが保管している。
本報告にあたり作成した図面と撮影した画像もあわせて名古屋や城調査研究センターが保管する。
- 5.出土遺物は新宿区四谷三丁目遺跡調査団1991「江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)」『四谷三丁目遺跡』を参考に材質ごとに磁器、陶器、炆器、土器、瓦類、須恵器、山茶碗、ガラス製品、自然遺物に大別し、碗類、皿類、鉢類、瓶類、水柱類、瓦類、その他に分類した。
遺物の年代観は愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』によった。
遺物の計測位置は図1の通り。

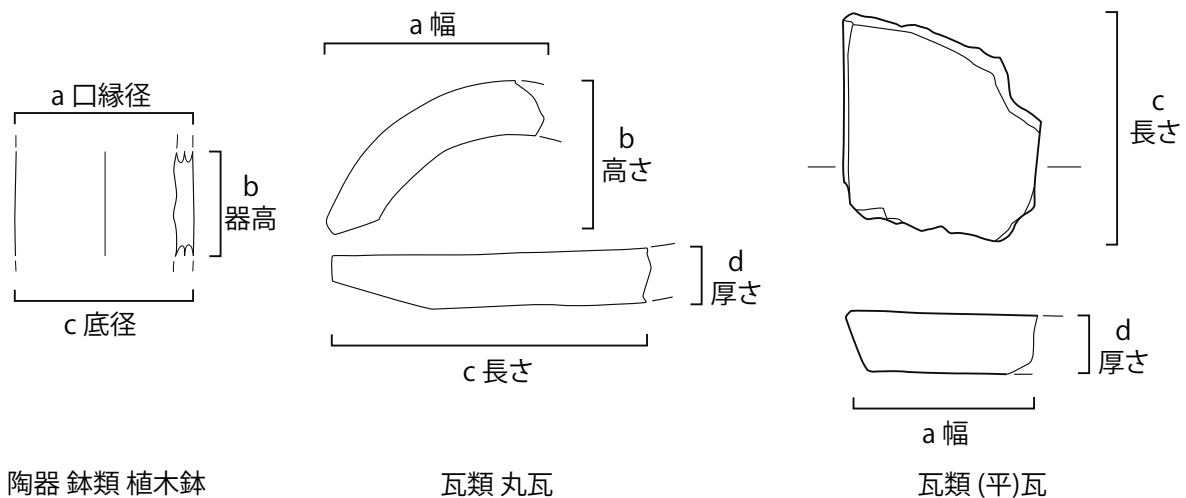


図 1 計測位置図

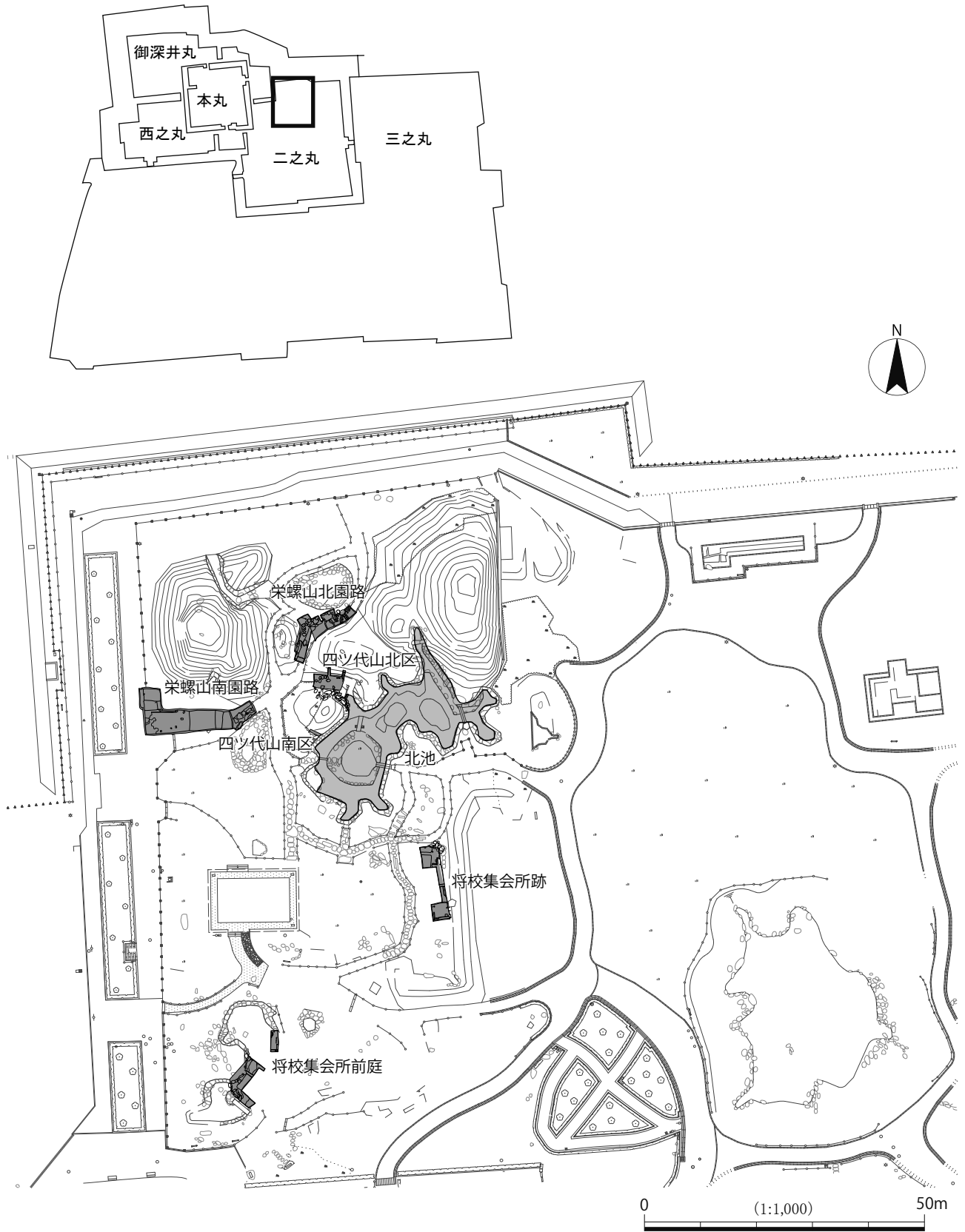


图2 第5次調査調査区位置図

～28cmの立面長方形の間知石様の石材が部分的に積まれている。土留めのための石積みと考えられる（写真2）。西側と北側は緩傾斜で平坦面に接続している。山稜がなだらかなためか現況では土留めの石組や石積は確認できないが、山麓から中腹にかけて数石の景石を確認することができる（写真4）。

四ツ代山の比高は現地表から約2.2m、池底から約3.6mで、北東-南西約9.5m、北西-南東約6.5mである。二之丸庭園で最も高い権現山が現地表から約7m、四ツ代山の南西隣に位置する笹巻山が約3mである。四ツ代山が他の築山と比較して小規模な築山であることがわかる。

近世の二之丸庭園の様子を描いた絵図を確認すると、「御城二之丸図」（名古屋城総合事務所蔵）（図3）と「御城二之丸御庭之図」（名古屋市蓬左文庫蔵）（図4）に「四ツ代山」と記載がある。『金城温古録』や「二之丸御庭道及踏石図」、「御城二之丸之図」（いずれも名古屋市蓬左文庫蔵）などでは田楽山、栄螺山、笹巻山などの山名は記されているにもかかわらず、四ツ代山は記載がない。絵図ごとに山の描かれ方は異なるが、上記全ての絵図の北池北岸西側に

は位置関係から四ツ代山と推定できる築山が描かれている。四ツ代山自体はこれら絵図が成立した時期から存在すると考えられるが、山の規模が小さいこともあり、絵図の作者によっては特に注目すべき築山ではなかったのだろう。

現在の地形をみると四ツ代山から権現山に続く山脈状の築山には2つの鞍部が存在する。そのうち四ツ代山と田楽山の間鞍部が最も低い。先に挙げた「御城二之丸御庭之図」と「御城二之丸図」を見ると田楽山と四ツ代山間に道が通っており、庭園の北西と北池を結ぶ鞍部を利用した道であることがわかる。道は山中で丁字路となり、四ツ代山山頂へ向かう道が分岐する。分岐した道は飛石の意匠で描かれている。枝分かれした道は山頂付近でさらに2つに分かれ、1路は北池へ、もう路は笹巻山の西側へ通じている。この2つの道は飛石の意匠ではなく実線で描かれている。

なお、「御城御庭絵図」や「尾二之丸御庭之図」などにも位置関係から前述の絵図と同じく四ツ代山と田楽山の間を抜けると推測できる道が通っている。



写真1 四ツ代山 北池側（南から）（現況）
下からタタキ製の護岸、石組み



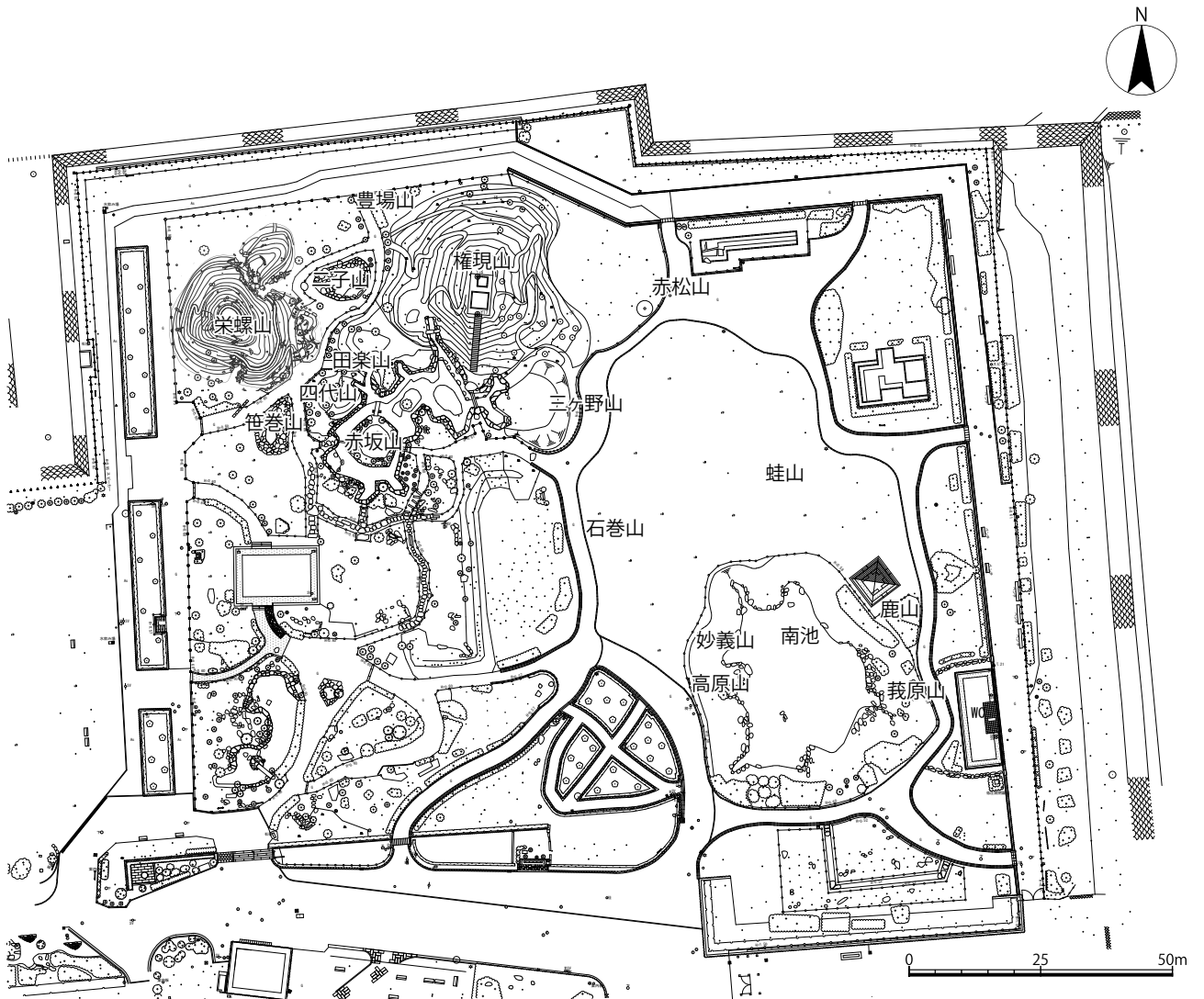
写真2 四ツ代山 権現山・田楽山側（南東から）
（現況）中央に間知石様の石積みが写る



写真3 四ツ代山 南西から
写真左栄螺山と写真右笹巻山の間
に四ツ代山が見える

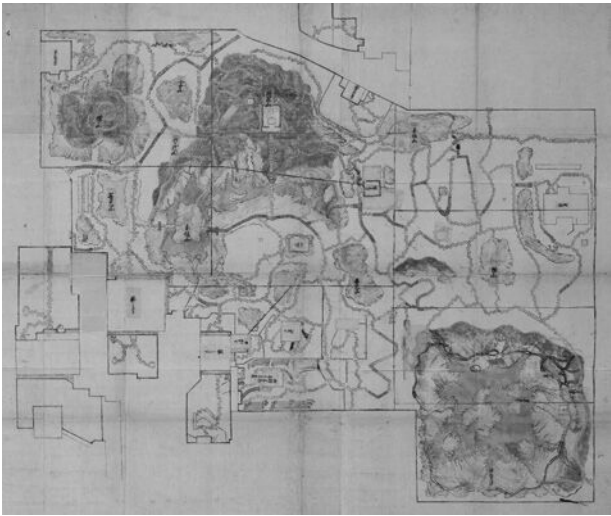


写真4 四ツ代山 北から

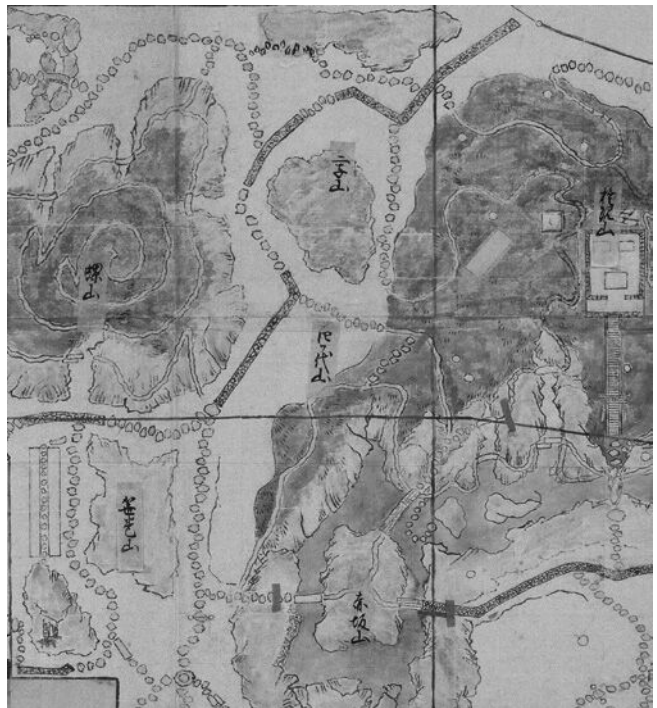


縮尺は任意
名古屋市 2023 『名勝名古屋城二之丸庭園整備計画書』より引用 一部改変

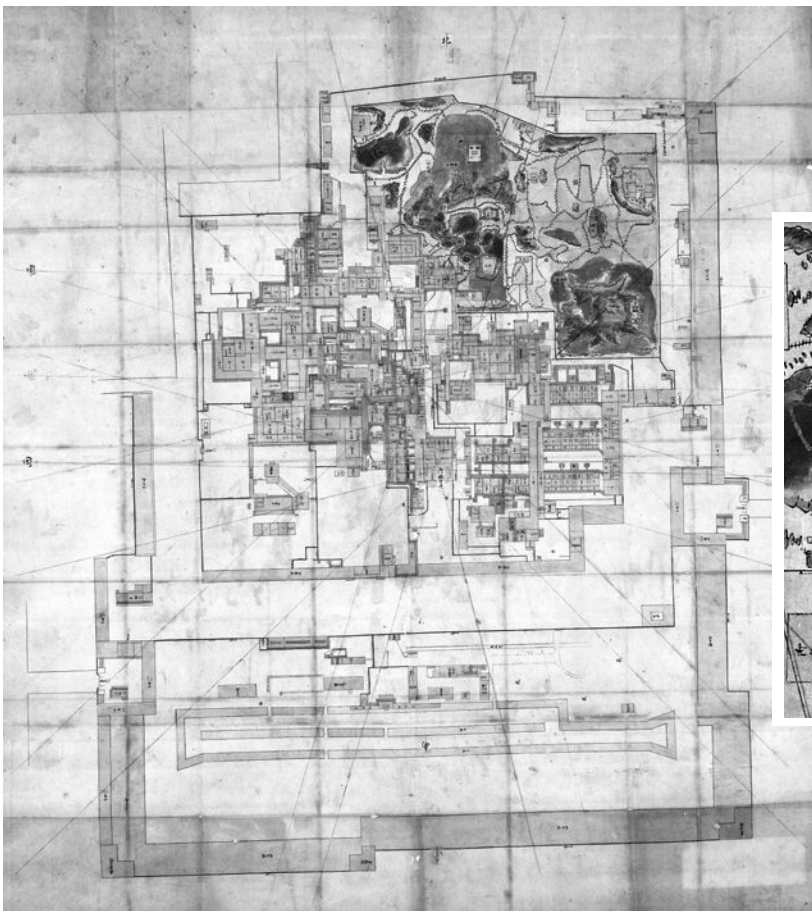
図3 築山配置図



御城二之丸御庭之図 (名古屋市蓬左文庫蔵)



御城二之丸御庭之図
四ツ代山拡大



御城二之丸図 (名古屋城総合事務所蔵)



御城二之丸図
四ツ代山拡大

図4 四ツ代山収録絵図

3 四ツ代山調査区の概要

四ツ代山調査区は四ツ代山の山麓に北区と南区の2箇所が設定された(図5)。これら調査区の南側に北池調査区が、北側に栄螺山北園路調査区が設定されている。

北区は四ツ代山と田楽山を区画する鞍部に位置する東西約5m、南北約2mの長方形の調査区である。「御城御庭図」などの絵図に描かれた四ツ代山と田楽山の間を通る園路を検出するために設定されたと思われる。実際に現地を確認すると明確な道は確認できないが栄螺山西側の園路と北池北岸を結ぶ峠のような地形である。調査区の北側に南北約1m、東西約0.5mの拡張区が2箇所設けられた。西側の拡張区を西拡張区、東側の拡張区を東拡張区とする。実際の調査では拡張区、東西約5m、南北約2mの長方形の調査区の順に掘削されている。

南区は四ツ代山南西麓に北西-南東約4m、北東-南西約0.5mの長方形の調査区が設定された。調査区南側は北池に面し、北東側は四ツ代山南西麓の石組が広がっている。石組は北池西岸の平坦面と四ツ代山を区切るために組まれたと考えられ、平坦面側の石組と合わせて小規模な滝組となり溪谷を形成している。滝組と溪谷と溪谷の底の検出が目的だったと思われる。

掘削は北区約11㎡、南区約2㎡で行い、加えて調査区周辺で落ち葉や腐葉土を除却し、四ツ代山が機能していた時期の地層を露出させる清掃調査が行われた。清掃調査は四ツ代山の調査区側斜面(北東側、南西側)と北池側斜面(南東側)で実施された。清掃調査によって草木や埋表土のため判然としていなかった景石や石積の輪郭や土際の様子を明確にし、四ツ代山全体の検討を行う素地が作られた。調査成果としては清掃後に平面図(図5)とオルソ画像(口絵4)が作成された。

なお、清掃調査では絵図に描かれた鞍部から

表2 発掘調査日誌 四ツ代山調査区 抄

年月日	調査内容
2017/7/20	調査区設定 表土除去
2017/7/21	地表面から約0.4m下で飛石を確認
2017/7/24	東西方向に並ぶ飛石を4石確認
	記録作業
	埋め戻し

分岐し山頂へ向かう飛石は確認されなかった。

3 調査成果

3-1 北区(図5・写真5～8)

東拡張区にて現地表面から約0.4m掘削したところで石1が確認されたため、石検出面の高さで調査区全体を掘削した。石は調査区西側で東西方向に4石(石2～5)が並び、拡張区で確認された石1と合わせて6石確認された。石1の北から石aが、石2～5の南から石b、石c、石dが確認された。調査区の東側で北側に面を持つ石が東西方向に4石並ぶSS1が確認された。

発掘調査日誌(表2)を見ると表土除去後すぐに右1～5に相当する「飛石」を検出しており、写真5～6を見る限りでは複数回の土の堆積は確認できない。壁面は表土のみの単層、すなわち表土直下に検出面が存在すると考えられる。そのため以下に記載する遺構は全て同時期に機能していたと判断し考察を行う。土層断面図は作成されていないが、単層と認識したため省略したと考えられる。

3-1-1 飛石(石1～5)

石2～5(写真5～6)は長軸0.4～0.8m、短軸0.2～0.4mの平面形状が楕円形に近く、上面が平坦な石材が互いに長辺を向かい合わせて並んでいることから飛石と判断した。石1は周囲を調査していないため続きを確認できな

かったが、規模や形状が石2～5と類似しているため、飛び石と判断した。なお、日誌をみると調査当時から飛び石と判断していたようだ。

石が据えられている面は標高約13.1mで飛び石の踏み面（頂部）の標高は石1が13.01m、石2が13.02m、石3が13.05m、石4が13.09m、石5が13.12mでおおよそ揃っている。現在の地形は傾斜があり峠越えの様相を呈しているが、飛び石が機能していた時期は平坦な園路であったと言える。

図面、写真、日誌等調査記録から飛び石構築に伴う掘方は確認できない。地面を掘り下げて設置するのではなく、地面に石を据えた上で土を盛った可能性が考えられる。すなわち検出面と飛び石は同時に構築された可能性が考えられる。

岩石種は検出時に鑑定していないため正確にはわからないが、写真から判断すると石3～5は美濃帯の砂岩（いわゆる河津石）、石2は美濃帯の砂岩またはチャート、石1は層状に堆積して岩石化したチャート（以下、層状チャートという。）と考えられる。

3-1-2 景石（石a～d, 石 α ）

石aは長軸約0.5m、短軸約0.3m、高さ約0.3mの加工した痕跡が見られない野面石で、岩石種



写真5 南区（北から）
左から石2～5、石、石c、石d、石 α

は写真や類例から判断する限り砂質または泥質片岩ある。石bは長軸約0.7m、短軸約0.5m、高さ約0.4mの割石で割面を底部としている。岩石種は写真や類例から判断した限り砂岩である。石cは長軸約0.6m、短軸約0.4m、高さ約0.3mの野面石で、岩石種はチャートである。

石aは地形が北に向かって高くなる起点、すなわち田楽山の山裾に据えられている。

石b、cは地形が南に向かって高くなる起点、すなわち四ツ代山の山裾に据えられている。これらの石は四ツ代山と田楽山の間を修景する役割を持つ景石と考えられる。また、部分的な土留めの役割も想定できる。

石dは四ツ代山の南裾に据えられている。石a～cと比較して小さく上面が平坦である。石b及びcと同様に四ツ代山の修景と土留めを兼ねた景石であると考えられる。一方で飛び石と判断した石1～5と比較しても小さいが、飛び石列の延長上に位置することと上面が平坦であることから飛び石の続きである可能性も考えられる。

石a（写真7）は北区の範囲外に位置し、清掃調査によって土際まで明確に観察できるようになった石である。石の規模は長軸0.7m、短軸0.5m、高さ0.6mで、岩石種は花崗閃緑岩である。四ツ代山の修景と土留めを兼ねた景石と考えられる。石aの周辺にも清掃調査で観察が



写真6 南区北池側（南から）

容易となった景石は十数石存在するが、石 a は加工方法が周辺の景石と異なるため、ここで取り上げる。

石 a は北側と西側の面を矢穴技法によって作られた石材である。矢穴の規模等は表3の通り。北池の景石として使用されている花崗岩や花崗閃緑岩には矢穴や刻印が確認でき、規模は石垣の築石と近い石が多い。石 a は規模や岩石種や加工方法から現位置でいう上面を面として幅



写真7 石 α (北西から) (現況)
矢穴が上面に4箇所、北面(右面)に2箇所確認できる。

表3 石 α 上面 矢穴計測表 (mm)

矢穴 No.	長(矢穴口長辺)	幅(矢穴口短辺)	深さ	矢底幅	矢底厚	矢穴間隔
1	100	-	(50)	70	(15)	36
2	94	(15)	71	70	(15)	41
3	94	(15)	59	71	(19)	69
4	(86)	(22)	(40)	70	(22)	-

※(数字)は残存値 -は計測不能
矢穴No.は北から順に振った

表4 石 α 北面 矢穴計測表 (mm)

矢穴 No.	長(矢穴口長辺)	幅(矢穴口短辺)	深さ	矢底幅	矢底厚	矢穴間隔
1	95	-	(54)	-	-	44
2	(90)	-	(44)	-	10	-

※(数字)は残存値 -は計測不能
矢穴No.は上から順に振った

0.7m、高さ 0.5m、控え 0.6m の築石を景石に転用した石材であると考えられる。

なお、石 c と石 a は現在も地表に露出しているため岩石種は筆者が確認した。

3-1-3 SS1 (写真8)

SS1 は長さ約 0.3m 弱の切石 4 石が面を田楽山側(北側)に向けてやや北に膨らみ弧を描くように東西方向に並ぶ石列である。弧の角度のまま南東へ延長すると写真2と写真8で確認できる間知石状の石積(以下、SS2という)が存在する。岩石種は写真から判断する限り美濃帯の砂岩である。

周辺の地形はSS1を境に北側は平坦面であり、南側は四ツ代山山頂に向かって高くなる。すなわちSS1が四ツ代山山裾の末端となる。

石の頂部のみ露出させた状態であるため、石全体の形状は不明であるが長さ 0.3m 弱とある程度揃っている点が間知石を志向しているように推測でき、南東延長上のSS2(写真9)の存在からこれらは接続する一連の遺構と考えられる。これらを結ぶと図6のようになり、SS1と



写真8



写真9 間知石状の石積（北東から）
写真中央の樹木下に間知石状の石積が確認できる。SS1は山に隠れて確認できない。

SS2は四ツ代山の東尾根の山裾の末端となる。四ツ代山の東尾根裾から北池への土砂の流出を防ぐ土留めであると推測できる。

SS1の掘方は確認できなかった。飛石や景石のように掘方を持たない遺構である可能性もあるが、SS1が南区検出面（標高約13.1m）の高さで未だに石材頂部しか確認できていない。また、石積であると想定するとさらに下段の石列が存在する可能性が考えられる。すなわち南区検出面堆積以前に構築され、その後に南区検出面が堆積したと推測できる。掘方の有無に関わらず飛石を検出した面までとした本調査区ではSS1構築時の痕跡を見ることはできない。

ただし廃絶が飛石の設置に先行するとは考えにくい。飛石及び南区検出面がSS1前面に構築及び堆積し、SS1の大半が埋没するが、SS2が現在まで地表に露出していることからSS1～SS2は部分的に存続し続けた可能性⁽³⁾がある。

3-1-4 出土遺物

南区からは34点1793gの遺物が出土した。出土遺物の詳細は表5の通り。

34点中24点（約7割）が瓦である。庭園造園時～近代にかけて周辺に建物を想定できない空間であるにもかかわらず、瓦の割合が最も高

かった。この傾向は小規模な調査区を多数設定し二之丸庭園全体の遺構残存状況を確認した第7次調査と第8次調査でも瓦の割合が全体の約7割（名古屋城調査研究センター2024『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第7次・第8次⁽⁴⁾』）となるため、建物が近接しているか否か、庭園か御殿かなど調査区の位置が遺物の構成に与える影響はあまりないようだ。

この中から丸瓦1点（表54 図7北1）と（平）瓦1点（表55 図7北2）を図化した。

北1は前端部と側端部の一部が残存している。厚さは21mmで二之丸庭園から出土した丸瓦の中では厚手である。前端部と側端部はそれぞれ2回面取りされている。表面は横方向に撫でた痕跡がわずかにみられるが、全体的に不明瞭で調整は判然とししない。裏面は布目痕が若干残存し、その上から横方向の調整が確認できる。

北2は側端部の一部が残存している。瓦当が確認できず、平瓦か軒平瓦か確認できなかったため、厚さは20mmで北1と同じく二之丸庭園から出土した平瓦の中では厚手である。側端部はヘラで構築した後に上端と下端が面取りされている。下端の面取りは浅く不明瞭である。

3-2 南区（図5）

調査面積が狭いこともあり。南区に関する情報量が少なく、日誌の記載もなかった。北区では遺構、遺物ごとに小見出しを設けたが、南区は一括して記述する。

調査区内から確認された石は石e～iの5石である。石eは長軸約0.8m、短軸約0.6mで岩石種は写真写真がなく判断できなかった。石fは長軸約0.6m、短軸約0.4mの野面石で岩石種は佐久島石産の砂岩である。石gは長軸約0.5m、短軸約0.5mの野面石で岩石種は佐久島石産の砂岩である。石hは長軸約0.4m、短軸約0.2m

表 5 四ツ代山調査区出土遺物一覧

番号	調査区	出土地点	出土層位	材質	種類	数量(点)	重量(g)	備考	産地	図化
1	四ツ代山	北区	表土	陶器	碗	1	1	志野	瀬戸・美濃	
2	四ツ代山	北区	表土	炆器	甕	1	140	赤物	常滑	
3	四ツ代山	北区	表土	須恵器	不明	1	1			
4	四ツ代山	北区	表土	瓦	(平)	25	1181			○
5	四ツ代山	北区	表土	瓦	丸	3	429			○
6	四ツ代山	北区	表土	瓦	丸	1	39	被熱		
7	四ツ代山	北区	表土	金属	釘	1	1	陸軍か		
8	四ツ代山	北区	表土	ガラス	不明	1	1			
9	四ツ代山	南区	表土	陶器	鉢	1	18	植木鉢	瀬戸・美濃	○

で岩石種は写真写真がなく判断できなかった。石 i は長軸約 1.0m、短軸約 0.5m の野面石で、美濃帯の砂岩である。

これら石のうち、石 f と石 g は地形が北に向かって高くなる四ツ代山の山裾に据えられている。四ツ代山の修景と土留めを兼ねた景石と考えられる。

石 e、石 h、石 i も同様に地形が立ち上がる起点に据えられており、北池への土砂の流入を防ぐとともに、北池周辺を修景する役割を持っていると考えられる。

調査はわずかに堆積した表土を除去し掘削を完了したため、結果的に清掃を主体とした調査となったようだ。調査区床面は調査写真を参照した限り、調査区全体が同じ暗褐色である。調査の結果、南区は本来周囲より約 0.2m 低く北西-南東へのびる谷状の地形となっていたことが明らかにされた。調査区は四ツ代山と四ツ代山の南西の平坦面を区切るところにあり、北池に向かって（南東に向かって）下る谷状の地形であることが明らかになった。

出土遺物は瀬戸美濃製の陶器の植木鉢片（表 5 9 図 7 南 1）が 1 点出土したのみで、他の調査区から多く出土する瓦は出土しなかった。

南 1 は体部のみが残存している。ロクロで成

形されており、内外面にロクロ由来の横方向の調整が確認できる。外面全体に灰釉が施釉されている。内面は無釉である。体部が直線的で内面が無釉であることから植木鉢と判断した。生産時期は不明であるが、近代まで下る遺物ではないと考えられる。

4 四ツ代山調査区及びその周辺の考察

四ツ代山を南北に挟む形で設定した南・北区の調査及び周辺の清掃調査によって四ツ代山の山裾末端の様子を明らかにすることができた。山裾は北池に面した南東～南側は石組を隙間なく組んで北池への土砂の流出を防いでいることがわかった（写真 1）。南～南西側も同様に南区の成果から修景と土留めを兼ねた景石を配置していた。南～南西側は平坦面に面しているが直接接してはならず、南区が位置する谷状地形を介している。北西～北～北東側は平坦面と直接つながっているため、四ツ代山は北池に半島状に突き出た地形であると言える。

山の南東～西は SS1 とその延長上に存在する SS2 が土留めとして存在した。写真 1 のように土留めを兼ねた景石や石組みを主体とする四ツ代山山裾の中では山南東～西側は特異な形態となっている。その理由を考えると修景を主

な“仕事”とする景石や石組では四ツ代山から絶えず流出する土砂を十分に堰き止めきれないためと考えられる。石積が施工されている区間は北区から飛石が検出されたことからわかるように庭園の北東から北池へ接続する園路が通過する区間である。園路は四ツ代山と田楽山に挟まれた幅約1mの狭小な空間且つ北区からさらに北池方面へ進むと急な坂となり、北池際に接続する。この区間は現在でも降雨時に北池への土砂の流出経路になっており、また斜面は滑りやすく、安全に通行できなくなる。SS1及び間知石状の石積は修景よりも池や園路の維持と安全性という観点を重視したため構築された構造物であると推測できる。また、庭園鑑賞時のメインルート⁽⁵⁾と考えられるSS1～SS2は北池南岸から見通せない死角となっていることも修景より土留機能を優先した理由の一つであると考えられる。

飛石の園路はSS1及び間知石状の石積が構築した後に作られた可能性を指摘することができた。飛石はおおよそ東西方向に延び(石2～5)、石1がやや北に外れることから飛石の園路も一度北を向き、田楽山と四ツ代山に挟まれSS1～SS2に区画された空間を通り北池に接続するために南下すると考えられる(図6)。

絵図に描かれている四ツ代山山頂へ向かう道を確認することができなかったが、SS1が飛石構築後にどの程度存続していたかという点から、おおよその道の位置を推測できる。SS2が現在も四ツ代山の山裾末端となっていることから明らかのようにSS1～SS2は部分的に現在まで存続している。検出されたSS1全体が石積として飛石廃絶時まで機能していたと考えると、四ツ代山山頂へ至る道はSS1より西側にしか成立しえない。しかしSS1が飛石構築時に部分的に(北区で検出された範囲)廃絶していた場合、道は調査区内のどこからでも山頂へ

向かって分岐しうる。実際に現地を踏査したところ、SS1より西側のほうが勾配は緩やかで登り易い。あくまで現状地形で得た感触である。

調査成果と絵図を対比すると、付近に位置する栄螺山北園路調査区でも類似する規模、岩石種構成の飛石が確認されている。2つの調査区から確認された飛石の延長推定ラインを絵図を参考に作成すると図6のようになる。栄螺山北園路調査区飛石と四ツ代山調査区飛石は絵図を見ると接続しておらず、栄螺山北園路調査区飛石調査区南側で田楽山へ向かって大きく曲がる。田楽山へのとりつきは筆者が現況の田楽山を踏査した際に傾斜や景石にぶつからず最も登り易いと判断した地点に設定した。あくまで現況の地形と景石をもとに設定した。四ツ代山調査区飛石は調査区西側にある二子山と四ツ代山にはさまれた平坦面に向かってそのまま延長する。どちらも飛石をすべて通過することができ絵図から大きく逸脱しない。

四ツ代山調査区、栄螺山北園路調査区ともに発掘調査から得た情報⁽⁶⁾から遺構同士に新旧関係があることが明らかになったが、構築及び廃絶年代を明らかにすることはできなかった。ただし絵図との対比によって検出した遺構が「御城二之丸御庭之図」と「御城二之丸図」と重ねた際に矛盾しないことが分かった。これら遺構は絵図の成立年代に大きくかわる。本稿で遺構を報告したことで絵図の評価を含めて新たに検討する素地を作ることができた。今後は隣接する遺構の再評価や絵図と遺構のすり合わせを進めていかなければならない。

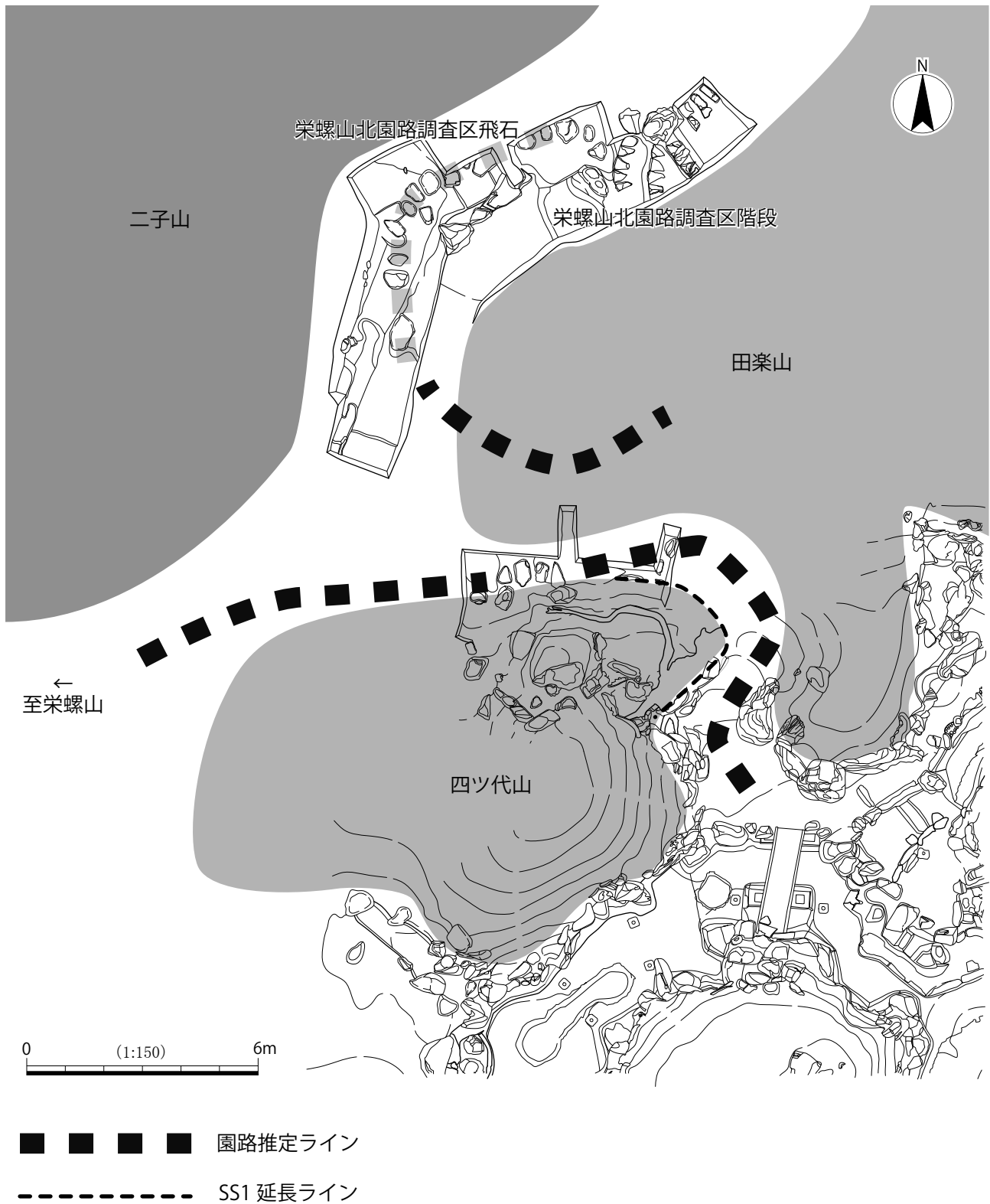


図6 四ツ代山調査区検出遺構 延長推定図

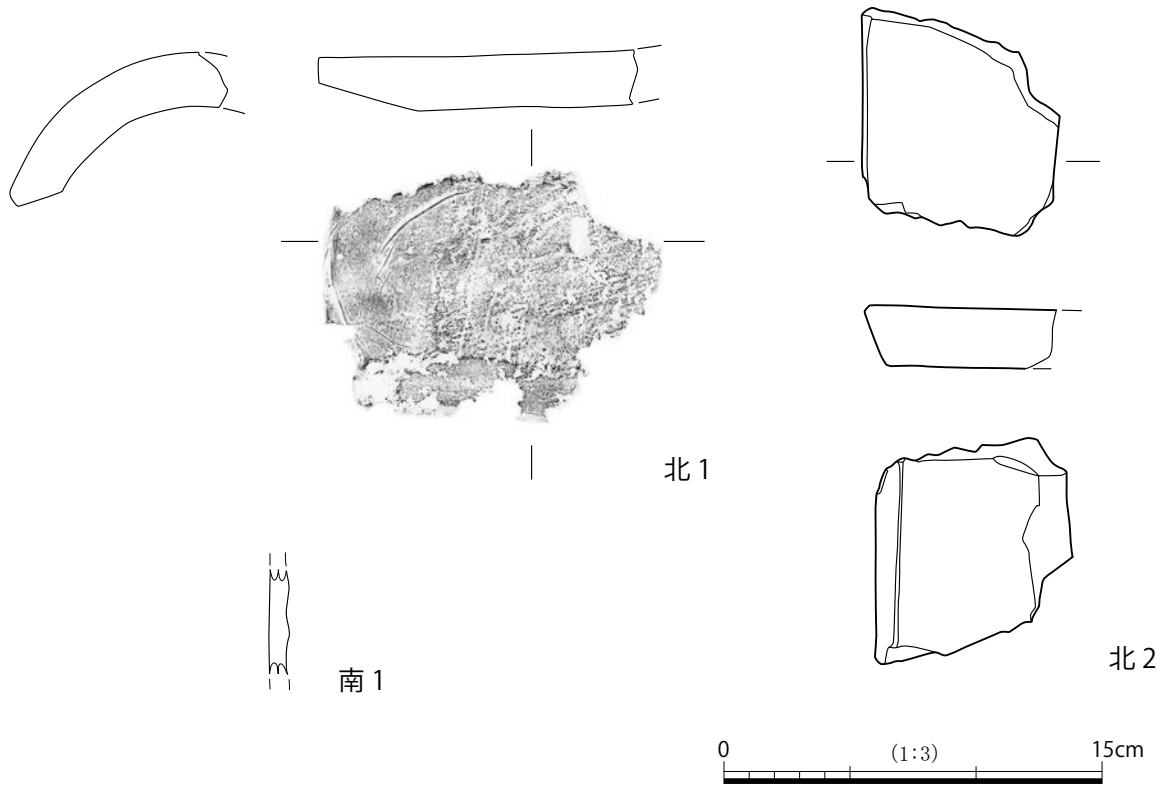


図7 遺物実測図

表6 出土遺物観察表

遺物 番号	出土地点 ・層位	材質	器種	法量(mm)				重量 (g)	成形 ・調整	生産 時期	生産地
				a	b	c	d				
北1	表土	瓦類	丸	(88)	61	(129)	21	337	内面に布目痕	近世	
北2	表土	瓦類	(平)	(77)	-	(89)	24	194		近世	
南1	表土	陶器	植木鉢	計測不能	(40)	計測不能	-	15	内面に口ク口 成形痕	近世	瀬戸・美濃

註

- (1) 『第4次～第6次報告書』では北園池という呼称されていたが、2024年以降は北池と呼称しているため、本報告でも北池とする
- (2) 1976年～1977年度に実施された名古屋城二之丸庭園第1～2次発掘調査と調査を行った組織が異なるため、回数に重複が見られる。区別するために2013年度から行われている発掘調査事業名に“名勝”をつけている。
- (3) SS1は西側にも延長する可能性がある。ただし、検出面で明確なSS1に関連する採取痕が確認できず、また、地中に残存していたとしても、検出面を構築した時点でSS1西延長は土中にあり、機能を残していたとは言えない。つまりSS1西延長が検出面で確認されなかったという点で、飛石構築時にSS1西延長は廃絶していた。
- (4) 第7次調査・第8次調査の他に北池一帯に5箇所の調査区を設定し北池の状況を確認した第10次調査（北池）でも総出土量と遺物構成の割合を算出している。瓦の割合は全体の45%である。ただしこれは第5次調査で埋土を一度除去した後に実施した調査である。参考までに提示する。（名古屋城調査研究センター2025『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 北池 第10次（北池）・第12次 付名古屋城二之丸庭園 1976年度・1977年度発掘調査報告』参照）
- (5) 嘉永元年（1848）に松平義建が庭園を鑑賞したルートを中心に考えている（名古屋城調査研究センター2026「第1章第2節歴史的環境」『名古屋城調査研究センター2025『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 北池 第10次（北池）・第12次 付名古屋城二之丸庭園 1976年度・1977年度発掘調査報告』）
- (6) 『第4次～第6次』では特に言及されていないが、栄螺山北調査区園路調査区では2つの面からそれぞれ飛石や階段を検出している。これら遺構は新旧関係にあると筆者は考えている。栄螺山北園路調査区をはじめとする二之丸庭園に存在する新旧関係にある遺構については、項を改めて考察したい。

参考文献

- 花木ゆき乃 佐藤公保 木村有作 2020『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次』
- 服部錠太郎ほか1967『名勝 史跡 名古屋城の庭園—今も生きている城郭庭園の歴史と秘密—』
- 新宿区四谷三丁目遺跡調査団1991「江戸遺跡検出のやきもの分類（兼凡例）」『四谷三丁目遺跡』
- 愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』
- 名古屋市2023『名勝名古屋城二之丸庭園 整備計画書』
- 名古屋城調査研究センター2024『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第7次・第8次』
- 名古屋城調査研究センター2025『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 北池 第10次（北池）・第12次 付名古屋城二之丸庭園 1976年度・1977年度発掘調査報告』

《Title》

An additional report of the 5th excavation research at North Pond and artificial mounds, Ninomaru Garden in Nagoya Castle

《Keyword》

Archaeological site report, Ninomaru Garden, Yotsushiro artificial mound, North Pond, Gosensui Pond, garden path, *Tobi-ishi*; stepping stone-paths, promenade pond garden